

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02367

研究課題名（和文）東洋古典園林思想を用いたインスタレーション表現の実践研究

研究課題名（英文）The Practical research of installation art works using of the thought eastern classical gardens

研究代表者

高橋 治希 (takahashi, haruki)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：10464554

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：現代美術における空間表現（インスタレーション）について、西洋美術の文脈ではなく中国の園林や日本の林泉の在り方から再考した研究である。日本において伝統的に芸術は生活と一体である態度に基づき、園林や林泉がその態度を具現化した空間と捉え、その構造と思想を援用したインスタレーション作品を芸術祭や美術館で発表した。またその表現技法のひとつとして、明治期における磁器の緻密な造形技法に着目して、出石焼『白磁籠目菊花紋貼付壺』の部分再現を行い、その花卉等の伸びやかな表現技法を中国・徳化窯の練花技法から見出した。その成果は兵庫陶芸美術館で行われた出石焼の企画展で、資料展示やカタログ、ワークショップ等で紹介した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代美術におけるインスタレーションの空間表現の在り方を、伝統的に生活と芸術の一体化している日本において、どのような表現や応用が可能か？伝統的な庭園である林泉を中国の園林の在り方に遡って、その本質的な可能性を実践的に表現で探究したことは、建築を含む生活景観を再考する起点の一つとなりうる。またその表現方法として効果的と思われる緻密な陶磁器造形の手法について、「出石焼貼り花技法」の部分再現を行い、資料展示として発表したことは、現在十分に伝承が行われていない明治期の芸術性の高い表現の再興を促すことも期待され、今後の陶磁器造形の表現の一助として寄与するものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This is a study that reconsiders the installation work, which is a spatial expression of contemporary art, not from the context of Western art, but from the ideal state of gardens in China and Japan. In Japan, Life and art are traditionally united, and the garden reflects that idea. I presented installation works using the structure and ideas of the garden at the International Arts Festival and the Museum of Contemporary Art. In addition, as an expression method, I explored the techniques for finely shaping flowers that was almost lost after the Meiji era, and succeeded in partially reproducing it. The results were presented at special exhibition on the theme of Izushi ware held at the Museum of ceramic Art Hyogo. There, we held an exhibition of materials, a catalog, and workshops to introduce modeling techniques.

研究分野：空間表現

キーワード：空間表現 インスタレーション 出石焼 徳化窯 園林 庭園

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インスタレーションは西洋美術における空間表現の一つとして、コンセプチュアルアートとの関連の中でミニマルアートの物質と空間の関係を起点にしながら、個人や社会的な出来事、心情等を空間に表現できる手法として広く美術館やギャラリー等で展示されている。また多文化共生の中、地域の在り様や時代の変化と並走しながら、それを批評し続けるという広い領域をもつ表現形式である。しかしそうしたインスタレーションの自由度に共感しつつも、庭園や茶室などに慣れ親しんだ者にとって、作品によっては少なからずその空間の扱いに違和感や閉塞感をもつ時がある。それは芸術に対する地域の文化的背景の違いであるかもしれないが、その違和感の本質を明らかにすることが、インスタレーション表現を行う上で重要と考えている。そのため、まず西洋美術の文脈から距離を取るため、研究者が以前取り組んだ『日本・中国のインスタレーション作品に見られる東洋古典園林的要素に関する実証的研究』(JP26370166)で得た東洋的表現の視座である「森羅万象を貫く精神的支柱を持ちながらも、表面上は逆に森羅万象の些細な変化に身を浸す表現」の態度から、そこに引き出される表現を読み解くことで、違和感の正体を見出しそれを克服する表現を考察できると考えた。

2. 研究の目的

研究者が述べるインスタレーション作品の空間の違和感や閉塞感とは何か、について、園林や林泉における東洋的表現空間の在り方からインスタレーション作品の制作と発表を行うことで、その違和感と閉塞感の本質を探り当てる。その上で眼前の空間ですら分断と接続が混在する中で、芸術と生活の分断と接続が無関係ではいられない事や、その無関係ではいられない空間の構造にあらたなインスタレーションを含む空間表現の起点を見出す事、さらにその表現技法として、明治期の「出石焼貼り花技法」に見られる高度な磁器造形技法を参考にしながら、十分にその伝承が行われていない現状を顧みて、技法の調査と習得を行い、広く紹介することで、陶磁器造形における緻密な造形の再興に寄与することを目的とした。

3. 研究の方法

自身の先行研究である『日本・中国のインスタレーション作品に見られる東洋古典園林的要素に関する実証的研究』(JP26370166)で得た園林調査と知見を用いて、園林の背景にある思想や空間的構造、素材や現象に対する意識などを起点に、インスタレーション作品の制作に取り組んだ。その活動は以下の ~ ~ に示す技法の探求と2つの展覧会での実践から成っている。

陶磁器の細密造形技術の探求として、兵庫陶芸美術館に所蔵されている、1899年出石焼初代永澤永信作の『白磁籠目菊花紋貼付壺』の部分再現を通じて、白磁で作られた植物葉一枚一枚の精密さが醸し出す静謐と儂さが一体化した技法を探求した。当時の貼付け技法については不明な点が多く現存する技法の参考例として中国徳化窯にある「徳化練花技法」(支持体に薄い磁土の花弁を貼付ける技法)を現地で習得しながら、その表現方法を考察した。

瀬戸内国際芸術祭 2019 の機会を用いて、男木島の古民家内に窓から見える瀬戸内海の景観と連続した陶磁器による作品を設置した。現場は以前から本研究者の陶磁器を用いた作品が設置されていたが、今回で得た練花技法によって新たな作品として発表した。

金沢 21 世紀美術館の長期インスタレーションルームで『園林』と名付けた展示を行い、園林の構造と思想を現代美術のインスタレーションの形式で試みた。の古民家の開かれた場とは違い、美術館の特徴である外界から遮断されたニュートラルな場としてのホワイトキューブを閉じられた場と捉え、それを園林の高い塀に見立てながら現代における美術館展示室の形式

に園林の思想や構造を当てはめることを試みた。

4. 研究成果

上記 から の各研究方法による個別の成果と、 としてその本研究全体によって導いた空間表現の視座についての成果がある。

2018年に中国徳化窯（瓷苑仙子・铭记瓷艺）にて技法習得に加え、聞き取り調査と制作の記録を劉潤福副教授の協力の基、仁尾一人氏と連絡を取り合いながら行った。徳化窯は古くから良質な白磁の材料の産地としても知られ、花をモチーフとした造形は現在フラワーバスケットとして制作されている。繊細でありながら豪華で躍動的であり、その表現意図は出石焼「白磁貼花菊紋籠型壺」とは異なるように感じられるものの、出石焼における花卉の伸びやかな表現の多くが、徳化練花技法で再現できることが判明できた。帰国後その成果を兵庫陶芸美術館で開催された企画展「出石焼-但馬の小京都で生まれた珠玉のやきもの-」で紹介した。



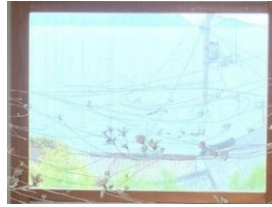
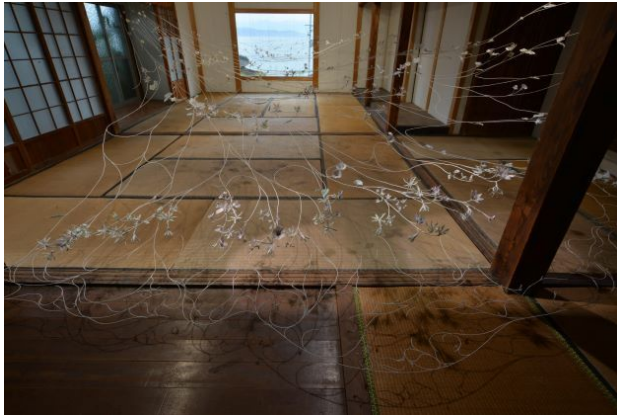
左 白磁貼花菊紋籠型壺 中 徳化窯フラワーバスケット 右 部分再現（焼成前）

『SEA VINE-波打ち際にて -』瀬戸内国際芸術祭2019

瀬戸内海の男木島の中腹にある古民家で発表されたものである。室内の窓からは島内の廃屋が所々に見え、遠くに瀬戸内海を臨むことができ、重層化した人の営みの減退とそれを再生するような光景が光と共に室内に差し込む。その光は室内に吊るされた陶磁器に輝きを与えながら、海のきらめきと人の営みの移ろいが融合し、やがて「儚さ」や「愛おしさ」といった感情が鑑賞者に芽生えさせる。そこに個々の人生観に繋がる心情的な糸口が現れると考えている。

作品は園林の形式的には禅庭の静的な構造をイメージで制作した。鑑賞者は手前の板間から座るか立つか、少なくとも視点を枯山水のようにほぼ固定して、窓の奥に見える瀬戸内海と手前に押し寄せる磁器の波を組み合わせて池泉として見立てることになる。加えて窓の奥に遠く見える瀬戸内の島々を築山として借景とすることを想定した。

陶磁器の花々は徳化練花技法を用いて、瀬戸内海に自生する浜辺の植物をモチーフに14種類制作し、波頭になぞらえて咲かせており、先端の花々はその延長線に伸びゆく、もしくは枯れるイメージにつながる位置に設置することで、鑑賞者は今後の作品全体の形態自体に変化を無意識に予測しながら鑑賞する。また作品は日の光の加減によって季節はもとより、天候や時間によって様々な表情を大きく変えるが、その時々で陶磁器の白さは透明感を帯びて海と同化したり、不透明感、影を帯びながら変容を繰り返している。



『園林』アペルト 13 高橋治希展

会場は一般的なホワイトキューブであり、高さ 6M 幅 8M 奥行 12M の比較的大きな空間である。その空間を中国の園林に見られる高い塀で囲われた閉鎖的な空間に例え、崑崙山を遠くに感じ見ながら川に例えた龍脈を辿っていく、もしくは海を越えて蓬萊三山へ向かう道筋の構造を援用しながら、日本の沿岸から中部山岳地帯で見ることが出来る植生 70 種類を表現した。

空間は大きく 5 つの視点に分かれる。1 つ目は足元ぎりぎりにまで押し寄せせる波を感じながら、遠く高山の頂を見上げる視点である。海から高山までの連なりが山の尾根でもあり、押し寄せる連続する波のようでもある。それは海の向こうにある崑崙山と一体化した空間であり、龍脈である川と一体化した空間とも言える。2 つ目は海辺から高山地帯に歩く道筋である。作品の左側に沿いながら原っぱの風景、沼地の風景などその植生を楽しみながら鑑賞者は回遊していく。次第に波は尾根に代わり、その尾根の一筋から分離した枝から花々が鑑賞者に覆いかぶさるように、頭上に広がる高木の枝が風と連動して激しい動きとなって鑑賞者に迫りくる。3 つ目は高山の頂に入りながらも、見上げた先に星空の天蓋、花々が小さな星の連なりとして天の川を見るような宇宙観の表現を試みている。1 つ目の空間が遠く頂をみる集約型の視点であるなら、この 3 つ目の視点は天蓋の異次元に抜ける穴であり、見下げた時の末広りの拡散的な視点である。

そうした意味で『園林』は人体のように表裏一体の構造を持っている。人体は外から外観すれば一つの個体でしかない。一方でその中に入ってしまうと広大な世界が広がる。それは天人相関説のような人がその形態に捉われず宇宙的な側面を内包することを示しており、そのこと自体が園林の最も重要なテーマであった。



まとめ

本研究はインスタレーションの空間操作に感じる違和感を園林の構造を読み解く視点でその素材と扱い、環境、光を磁器、徳化練花技法、古民家・美術館、照明に置き換えて探求してきた。

表現で用いられた透光性の磁器で作られた草木は 1280 度の高温で焼成され、光を透かしながら筆で描かれたように伸びやかな生命感を持つ。その造形がより繊細になるほど空間に遍満して、物と余白、言い換えれば有と無の共生が感じられる。そこには新たに生み出されようとする生命の形があり、出石焼貼り花技法にせよ徳化窯練花技法にせよ、彩色がない白磁そのままの緻密な表現は、仏教的な物心一如や色心不二の立場があるように感じられる。また展示において、古民家のような開かれた空間は、常に空間に作者の予想を超えた様々な干渉が連続して起こり、その干渉は連関としての世界の密着面であると共に、空間自体をも変容させ作品の微細な表情に大きく影響する。一方ホワイトキューブのような閉じられた空間では、作者の予想を超えた干渉は起きない。作者はより精神を研ぎ澄ませ素材と一体となって微細な変化を呼び起こす力量が求められる。その時、開かれた空間であれ閉じられた空間であっても、光の扱いは色心不二、時間や生命感の表現に大きく左右する。光は全ての生命の源であり、世界の始まりと終わりでもあり、実と虚に関わるものである。光のリズムを自在にコントロールすることが、事物の創世そのものと言って過言ではない。本研究で参考とした書籍に吉村貞司の『庭 日本美の創造』がある。p149 で次のように吉村は宇宙創成という言葉を用いて絵画から庭にかけての東洋的表現の在り方を説明している。

明末清初の画家、中でも呉彬、法若真、龔賢などの山水を見ながら、宇宙創成を感じる事ができた。岩は今生まれたばかりの、あるいは形をなしたばかりの、あるいは起源の形をむき出しにしているし、山霧が容赦なく吹きすさんでいる。彼達は一人として天地創造を口にしないが、作品には私の感ずる創世の大叙事詩とひびきあう根源のリズムがあった。中略 絵画は生きた力が迫って来る。雪舟は鎮田瀑によって、彼ら自身の宇宙を造成したのではないか。もし雪舟に庭があったら、筆で描くところを、石で描き、水で描き、樹によって作ったのではないか。そう考えるならば、庭こそは絵画よりもさらに宇宙創成に密着しているといえる。

ここではもう作家は個人ではなく、宇宙の仕組みのモデルのような地上に花を一輪咲かせるようなエネルギーの一つでしかない。もしくは一輪の花と本質的には同じである。

そこから本研究で導き出したインスタレーションの空間に対する違和感や閉塞感の正体は、空間の扱いが比較的個人的な領域や限られた時間内で表現されている事への不自由感だったと言える。私たちは伝統的に空間に対して精神的にもっと自由だった。園林で表現される世界は自身の身体を越えたところにあり、呼び起こされる一つ一つの心情が人生観全体そのものであり、さらに生を越えた本質を求めながら実のところ生そのものが実感される空間だったのである。その空間は実と虚の行き来や身体と外と内を包括する空間である。加えてその閉塞感を言い換えるなら、普段の生活の中で、自己の意識や社会的な仕組みによって空間が分断と接続が混在している不自然さに、インスタレーションですら解消しきれないのでないか、というジレンマだったのだ。そしてこの視座から得られる空間構造は少なくとも、領域や時間を意識できないものであり、今後そのような表現に関われればと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 兵庫陶芸美術館	4. 巻 1
2. 論文標題 出石焼の緻密な植物表現について 中国徳化窯からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 出石焼 - 但馬の小京都で生まれた珠玉のやきもの -	6. 最初と最後の頁 150 156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 uncnfrmed	4. 巻 334
2. 論文標題 Listing（作品写真掲載）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 FLASH ART No.334 SPRING 2021	6. 最初と最後の頁 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高橋治希
2. 発表標題 園林
3. 学会等名 金沢21世紀美術館 アペルト13（招待講演）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 高橋治希
2. 発表標題 作品 SEAVINE-波打ち際にて -
3. 学会等名 瀬戸内国際芸術祭2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋治希
2. 発表標題 資料展示
3. 学会等名 兵庫陶芸美術館企画展「出石焼－但馬の小京都で生まれた珠玉のやきもの－（招待講演）」
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>高橋治希 http://harukitakahashi.com (上記ホームページにて本研究の詳細を掲載予定) アペルト13高橋治希園林 - 金沢21世紀美術館 - http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=45&d=1787 高橋治希「園林」(金沢21世紀美術館)美術手帖 http://bijutsutecho.com/exhibit</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	仁尾 一人 (Nio Kazuhito)	兵庫陶芸美術館	
研究協力者	劉 潤福 (Liu run fu)	中国 清華大学美術学院	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------